

本稿は、8月22・23日に行われた第43回自治労連定期大会での代議員発言について、加筆・修正したものです。

つながりを力に学習・仲間の大切さ学ぶ 関東甲越ブロック青プロのとりくみについて

茨城自治労連

茨城自治労連青年部が青年未来づくりプロジェクトの成功にむけて取り組んだ内容について報告します。

茨城自治労連青年部は、7単組から常任委員が1～2人ずつ選出され、月に1回の常任委員会を開催しています。青プロについての話し合いも常任委員を中心に進めてきました。

青プロを多くの参加者で成功させたいという思いから、常任委員会では開催場所や学習内容、交流会内容など決めるべきことについて各単組の組合員の意見を聴くこととし、一度単組におろしてから意見を吸い上げて、一つにまとめてきました。地道で時間と手間のかかるものですが、この取り組みを通じて、多くの青年に計画の段階から青プロを知ってもらえたとともに、本番を迎える楽しみや、責任感が芽生えてきました。そして楽しみながら計画を立て、みんなで話し合いをして決めていく中で、単組の垣根を超えた結束が図られていきました。目標に向けて、青年が自ら行動し、仲間を組織していくことが仲間づくりには重要なことを、青プロを通じて学ぶことができました。

計画に携わってきた青年の中には、青年部を卒業され、バトンタッチをした人もいますが、ぜひ対面での青プロに参加したいと楽し

みにしている人もいます。

また、常任委員会の開催日にあわせて、青年部が主体となって学習会をオンラインで3回ほど開催しました。そこでは、青プロで学ぶ「災害対応と自治体職員」や、「民主的自治体労働者論」などについて、テキスト「ここから始める組合活動」や、新聞の切り抜きを活用して読み合わせや意見交換を行いました。学習会の様子を機関紙に掲載したことにより、多くの青年に、学習の大切さと青プロの開催を知らせることができました。

つながりを求めている青年たち オンラインで仕事を語り合う

今年6月6日の午後から、オンラインで行われた、関東甲越ブロック青年未来づくりプロジェクトへは、実行委員長を担った筑西市職の青年をはじめ、茨城から38人が参加しました。4人のパネラーからの報告では、「民主的自治体労働者論」の視点に立った通常業務の向上、住民サービスの拡充をめざす自治体労働者の重要性と、労働者の視点に立った仕事への向き合い方の大切さを学びました。また、千葉の台風災害、コロナ感染症対応にあたった東京の保健師など、緊急時の対応を経験したパネラーからは、人員不足による住民

への支援の脆弱さといった課題が指摘され、組合活動を通じて要求実現に取り組んでいくことの大切さを改めて実感しました。

後半行われた分散会は、3つのグループに分かれて意見交換を行いました。一人ひとりが、自分のことや職場のこと、聞いてほしいことや、聞きたいことなど、思い思いに話をしました。

職場は、人員不足で多忙で余裕がなく、必要な会話以外多くを語れず毎日が過ぎていく中で、青年は自分を認めてくれる存在や、話を聞いてくれる人など、つながりを求めていることがわかりました。

以上で発言とさせていただきます。

青年視点の「民主的自治体労働者論」とは？

来年、対面での青プロに臨む

コロナ禍で、仲間との食事会や新入職員歓迎パーティーなど、これまで行えていた活動ができない状況ですが、今後はオンラインを活用した交流をもち、一人の声をみんなで聞き、共感しあえる関係を数多くつくっていきたいと考えています。そして、コロナ危機や大災害での住民の困難を少しでも減らそうと懸命に奮闘する今の青年の視点で思う「民主的自治体労働者論」とは、どういうものであるのか、みんなで議論していけたらと思っています。

新入職員には、「聞かせてアンケート」に取り組んでいるところです。気さくに思ったことを記入してもらえるように文面も工夫しました。歳の近い先輩として、できるアドバイスや手助けをしていこうと思っています。

まだまだ活動の足りない青年部ですが、今回の青プロで得た単組間の結束と、つながりたい思いをさらにパワーアップさせて、来年対面で行われる青プロに臨みたいと思います。